

## 身装電子年表の作成に関する基本的課題 2 - 風俗・流行関連主題

高橋 晴子

### <内容>

1. 本稿の内容
2. 身装の具体的態様（状況）把握のための主要主題
  - 2.1 身装関連商品の市価を示すデータ
  - 2.2 とくに、身装の総合性についての〈風俗的標準〉を示唆するデータ
  - 2.3 同時代を対象とした写真、絵画による各種身装画像
  - 2.4 流行記事に関する補足
  - 2.5 データ採録についての採録者の判断、評価に関わる問題
3. 年表の具体的な画面構成 - 1894（明治 27 年）を例として
4. C 欄〈回顧〉の構想
  - 4.1 C 欄〈回顧〉の内容
  - 4.2 C 欄〈回顧〉の基本的構成
  - 4.3 C 欄〈回顧〉の抄出 - 「束髪」項を例として

### 1. 本稿の内容

本稿は、昨年度発表した「身装電子年表の作成に関する基本的課題：近代日本身装画像データベースを前提として」<sup>1)</sup>（以下、論文 1）を承け、とくに、論文 1 では言い尽くせなかった風俗と流行に関する問題、および紙数の関係で取り上げることのできなかった C 欄〈回顧〉について検討をおこなう。検討に入る前に、本「身装 - 身体と装い」電子年表の構成と基本的理念を繰り返しておく。まずは、本電子年表は web 上に公開することを前提としているということである。画像をとまなう年表であること以外に、別ウインドウを設けることにより、年表上のある記述の根拠となる資料の内容を、必要に応じてそのまま提示することができるという利点をもっている。

本身装電子年表の第一の目的は、‘ある時期（近代日本）、これこれのひとびとは、どのような身装によって生きていたか’ という、具体的イメージの提供に集約される。（論文 1 p.162）そのため本年表の基本的な枠組みは、データの内容と、それにもとづく利用の仕方に対応して、A 欄〈事件〉、B 欄〈現況〉、C 欄〈回顧〉の 3 つの欄に分かれている。

A 欄は、身装に関連のある一過性の事件を月を追って記述する。B 欄は、さまざまな状況の下での身装と、その周辺の生活・風俗の実態を具体的に知るために、同時代資料を根拠として、その手がかりを記述する。C 欄には、5 年、10 年、あるいはそれ以上の年月を経た後になって、

そのあたりの時代を振り返っての記述を紹介する。

なお、これら記述されるデータは、単に年次的事実の提示ではなく、事実に関するデータ、およびデータの存在を指示するものである。

また、本電子年表は単独でも機能するが、現在平行して構築中である近代日本を対象とした身装画像データベースの検索ツールとしての機能ももたせる予定である。より広く、その時代の身装に関連するモノとコトガラを理解するには、この身装画像データベースとのリンクが有効に働くはずである。

さて、本稿の検討課題は以下の3点である。

- 1) とくにB欄〈現況〉で取り上げる身装の具体的態様についての主要主題を再度確認する。
- 2) コンピュータ上における、同時代画像をふくむ関連情報の画面構成を提示する。
- 3) 不確定年代データについては年代枠を設けず、主題枠C欄〈回顧〉によって処理する。

## 2. 身装の具体的態様（状況）把握のための主要主題

検討課題1)については、以下の点について確認と補足をしておきたい。

### 2. 1 身装関連商品の市価を示すデータ

物価の概況を示す公的な統計は明治期前半から存在はするが、その数値は結局おおざっぱな標準のひとつである。そのために、一個人の生活の、さまざまな局面に十分に添うものではない。また、統計が出版される頃にはすでに、多くの新聞には商品市況が掲載され、その中には一部の繊維も含まれている。しかしそれは投機筋を対象とした、素材としての羽二重なり洋反りの卸相場であって、衣料品消費の実態とは関連が薄い。

1900年代以後になると大新聞の婦人・家庭欄に、小売相場というものがみられるようになる。しかしこれも、“小売相場のこれまで掲載せられていたものは、どこからでる材料によったものですかしら。実際の店頭の相場とはかなり没交渉であったようです”という批判がある<sup>2)</sup>。

生活に密着したものの値段については、データはできるだけキメ細かく、多面的であった方がよい。本年表では、小売店の商品カタログ、新聞等への価格広告のほか、データの乏しい時期には断片的ではあるが、古着の相場、質入れの値段、盗品の見積価格などまでも参考として採録する。

### 2. 2 とくに、身装の総合性についての〈風俗的標準〉を示唆するデータ

まず、身装の総合性であるが、これにはふたつの意味がある。第一の意味は、身装はそれが置かれた環境・情景の認識が不可欠である、ということである。第二の意味は、ひとの外観をなりたたせている視覚的要素のそれぞれは、ほんらい組み合わせによって成り立っているということである。

第一の意味の総合性を示唆するデータは、画像データの場合、たとえば〈銀座、ビル街〉、〈街路、交通〉、〈照明〉などの各年の街並風景である。また文字データでは、気候、都市問題、住居構造・居住様式、市民のエンタテイメント、家庭と個人の経済条件など、身装をめぐる環境的要

件が記述されているものを取り上げる。第二の意味の総合性を示唆するデータは、髪型、化粧から、履き物までの全体を示唆するデータである。

さて、これらの総合性を前提としての〈風俗的標準〉とは、ある時期、できるだけ広い範囲で普及した身装の態様、ということである。

こまごました日常生活のノウ・ハウの多くは、家族や地域の人間関係の中で意識せずに身につけられるが、そうした受動性が生活スタイルのゆるい共通性を生んでゆく。その共通性の内容が、ある地域や集団における風俗的標準であり、その標準に添って生きることによって、人々の社会的アイデンティティがなりたつ。この風俗的標準は、情報の普及度によってスケールがちがってくるはずである。こうした標準を対象として、あるいは前提として、身装に関する生活習俗を全体的に鳥瞰する必要がある。

このための資料としては、主としてつぎのような文献、造形作品類に見出される。

- a. その時代を対象とした 1) 新聞雑誌の生活欄、および家庭百科。 2) 服装史・論、民俗誌。  
— 〈基準事例〉
- b. 1) 同時代小説作品の登場人物の衣裳付け。 2) 芸者の春着予想など、着装全体の流行案内。  
3) 行き倒れ、行方不明者等の新聞記事。  
— 〈個別事例〉

## 2. 2. 1 風俗的標準の基準事例となる a 類の資料

a 類の資料は、鳥瞰的に対象をとらえて、その一般的特色を概括する。ただしどんなスタイルであっても、現実の風俗にはさまざまな小さなヴァリエーションがあり、とくに時代が移るにつれ、それまで標準とされたものが認識しにくくなってゆくの普通である。しかしどんなに風変わりであったりしても、その時代のひとに、商人であるとか、下町娘であるとかの推測が下せるかぎりは、それはやはり標準の輪のうちと考えられる。風俗的標準とは、画一的であることを意味してはいない。

当該期間のマスコミュニケーションによる伝達は、前半期には新聞・雑誌であり、後半期にはそれにラジオが加わる。こうしたマスコミュニケーションによる伝達も、女性を対象とする場合であると、『以良都女』(1887-1891) や『女学雑誌』(1885-1904) の時代では、少数の階層のあいだにかぎられていた。やがて 1910 年以後には、読売新聞の飛躍的発展のきっかけとしても指摘されるが、大新聞の婦人・家庭欄が充実した。さらにそれを追って、生活型女性雑誌の読者層の巨大化の時代へと移行する。生活型女性雑誌は、『主婦之友』(1917-) 『婦人倶楽部』(1919-) に代表される。それ以前に人気をもっていた『婦人世界』『婦女界』『婦人画報』と比べてはるかに大きな発行部数を獲得した主たる理由は、衣食住に関する日常生活重視だった、といわれる<sup>3)</sup>。また、家事百科とか、女性宝典といったタイトルの分厚い書物が、多くの家庭に 1 冊や 2 冊はあって、日常の相談相手になっていた。この種の刊行物は近世の女訓書や節用集の流れを汲んでいるともいえるが、たとえば博文館編「伝家宝典明治節用大全」(博文館 1894) のような教訓的性格の残っていたのは 19 世紀末までであったといつてよいだろう。女性雑誌の付録として企画されることの多かった家庭百科は、実用書であるとともに、読み物としての愉しさもねらいのひ

とつであったことは、映画スターなどに執筆させたコラムなどからもみてとれる。

女性雑誌の愛読者には男性も多かったが、多くの読者にささえられた啓蒙の記事や家事百科的読み物は、その時代その時代の日本人の、風俗的標準の成立への大きな貢献を果たしたといえる。

また当該時代を分析した服装史、服装研究が風俗・流行のデータとして重要であることはいうまでもないが、対象の時代と執筆の時期が離れすぎたり、個別的で、総合的視点に欠けるものの多いのは残念である。その一方で、行政上の意図に添うかたちで、1910年代から全国的規模で編集、刊行がはじまった、郡・町・村誌は、従来身装の研究者の目からは比較の見落とされてきた貴重な資料である。ただしこれらの町村誌は概して、民俗誌に共通する年次についての茫洋たる態度があるため、年表データとしての採録には考慮が必要だろう。

## 2. 2. 2 風俗的標準の個別事例となる b 類の資料

b 類の資料は、その時代の風俗・流行のなかにたまたま存在した、孤立したひとつの事例を指示している。

1875年（明治7年）の読売新聞の片隅に埋め草的に掲載された、身元不明の自殺者を例として。1月のある朝、東京芝増上寺の境内で、“年の頃四十ばかりの町人体の男”が首をくくって死んでいるのが発見された。半髪（丁髷）で、唐棧紺鼠の縦縞の綿入れに木綿藍の三筋縞の袷に小倉の帯をしめ股引を穿き一等々とある。〔読売 1875/1/8 (1)〕記者なり警官なりが、男を町人体と判断したのは、主としてこの着衣からであるらしい。ただしこれとはべつの、行き倒れや行方不明者の記事をみれば、商人だからといって、だれもおなじ縞や色合いの着物を着ているわけではないし、明治7年という時点では、東京ではすでに散髪の商人も多かった。しかしともあれ見るひとが見れば、この姿は町人なのである。

このように、b 類の資料の単発的な事例ではあっても、それはある風俗的標準の内容をより豊かに、かつ実態に即したものにするためのデータのひとつとして、適宜採録対象に入れる。

## 2. 3 同時代を対象とした写真、絵画による各種身装画像

身装の全体観を理解するには、画像資料の利用を欠かすことはできない。文字データによるどのようなくわしい説明も、その前提に全体の姿のヴィジュアルな認識がなければ、基本的な誤り、ときには滑稽な誤解を生じる場合のあるのは、われわれは経験上よく知っている。

このような理由から本年表では、各年ごとに、その年の風俗を描写したつぎの6つのイメージに、簡単にアクセスできるように設計されている。

A. 街の景観を背景とした人々 B. 未婚の女性 C. 既婚、ないし中年の女性 D. 男性 E. 子ども F. 美しい人像<sup>4)</sup>

AからEまでのそれぞれのイメージは、その年を代表するような理由があるといった、とくにむずかしい根拠によって選びだしたものではない。しかしその当該年を中心とした、風俗的標準に含まれる一事例を提示する。この標準の人物像を念頭に置いたうえで、年表の理解が望まれる。ただし、身装情報としても画像は万能ではないので、とくに次のような点については十分な

配慮が必要である。

a. 画像それ自体では、自分がなんであるかを説明できないことが多い。とりわけ、ほとんどの画像は、本来的な年代記述を欠いているものである。あとになって付加されたコメント―裏書き、キャプションなどの内容は原則としては疑ってかかるべきだから、画像の本来的な付随情報を見いださなければならない。

b. 画像は描かれた、あるいは写された対象物の真実を、かならずしも伝えてはいない。絵画には省略や観察のあやまりや、芸術表現としての歪曲がある。また写真の伝える事実とは、被写体の事実に過ぎないし、それとて保証されているわけではない。なお、以上の a. b. に関しては、すでに指摘している<sup>5)</sup>。

このような問題を前提とした場合、とくに写真資料の絶対量の少ない 1900 年以前では、新聞・雑誌の現代物連載小説の挿絵が、風俗画像資料としての貴重性をもっていることがわかってくるのである。

## 2. 4 流行記事に関する補足

論文 1 (p.168-169) において、流行記事をつぎの 6 つに区分して述べた。その 6 区分とは、1) 予測、2) 販売計画・キャンペーン、3) 市場・店頭情報、4) 観察記録 (店頭観察は 3) に含める)、5) シーズン末の総括、至近の回顧、6) 年月を経過しての回顧、である。1) ～ 5) までは、年表の B 欄〈現況〉で、6) は、C 欄〈回顧〉に記述するとした。

以上について補足をする前に、流行記事の採録と利用に関して注意すべき点を述べておきたい。

### 2. 4. 1 ふたつの流行

流行と一般にいわれる現象は、2 種類のものに区別できる。

1) スタイルの目新しさとユニークさ。あたらしいジャンルかタイプの出現、または、あるジャンルのなかで、A タイプが現れることによって、B タイプが捨てられるか、それに近いような場合。事例としては、1880 年代の舞踏会。女性の束髪。1920 年代の女性の断髪。1930 年代後半の銘仙の女性洋服 [『銀鐘』1939/10 月〈銘仙の洋服〉特集]。

現代に近いところでは、1960 年代のブルー・ジーンズ。ブルー・ジーンズの場合、若者のカジュアル・ウェアとしてのそれ以後の絶対的優位から、“風俗化した”という言い方がなされた。2) 多くのスタイルの選択肢のなかでの人々の好みの優位にあるもの、またそう期待されるもの。1910 年代以降、大新聞の女性読者向けの紙面拡張と、大きな読者をもつ婦人雑誌の競争の時代にはいると、夥しい流行レポートが、毎号の誌・紙面を埋めるようになる。それらの内容すべてが 1) に属するような内容であるとは考えにくく、そのほとんどが、青いブラウスのひともいるが、赤いブラウスのひとの方が多いという、人々の好みの優位にあるものとしての“流行”である。

年表項目としては 1) は当然採録されねばならない。1) であるか 2) であるかの判断は、同時代人にはむしろむずかしい場合があるが、半世紀以上を隔ててその後の展開をよく知っている

立場の人間にとっては、公平な判断が比較的可能である。同時に、その時代の身装の具体的な態様を把握する、という目的のためには2)のデータの選択的採録が必要である。

#### 2. 4. 2 流行の部分性

流行はかぎられた期間内の現象というだけでなく、一般には、人についても地域についても、部分的現象であることが普通である。また、身装の全体観を構成する数多くのアイテムのなかのひとつについての、または、いくつかについての現象であるのが普通である。個人の生活でも、特定のTPOにかぎって流行したスタイルであることが多い。

時代を遡るほど、風俗的標準の地理的な輪は、想像以上に狭かった。1880年代であると、東京市内とはいえ、慶應義塾や時事新報編集所のあった三田周辺は辺鄙な場末であった。その時代の三田住まいの記者の家に出入りする女髪結いの結う髪が、市中よりも2、3ヶ月は遅れているのを、髪結い自身が気にして、月に何度かは日本橋浅草あたりに出向いて、往来の奥様お嬢様方、また芸者の髪を見てこななければならない、という状態であった。[時事新報 1883/4/12 (3)] ほぼ同じ時代に、都会と地方との紋の大きさ、帯の高さ、女性の髪を根の高さの流行の違いを例として、記者はこうした現象を田舎の因果とよんでいる。[時事新報 1884/9/1 (3)]

このような現実を無視して、“○○の流行”という提示の仕方をすれば、誤解の原因ともなる。年表利用者が誤解を招かないためには、つぎのような方法で対処したい。

1) 流行の具体的態様を、簡単な説明を添えて示す。

“書生羽織の流行” → “男女ともに書生羽織（丈長の綿入れ羽織）流行”

2) 標準的身装の参照をつねに求める。誤解を生じやすいアイテムには（うへの例では 書生羽織）、構築中の身装画像データベースとリンクをはかり、多くの画像事例にアクセスできるようにする。

3) 流行については、終息時期など、時系列情報があれば、それを付け加える。

#### 2. 4. 3 補足

先に述べた6種の流行記事であるが、論文1で断ったとおり、このように分けた流行情報のそれぞれが、相拮抗するほどに充実するのは1910年代以降のことである。本稿では、それよりやや遡った明治期の様相を検討する目的も兼ねて、主として明治期から事例を選び、6種のうち、1) 予測、3) 市場・店頭（店頭観察を含む）情報、5) シーズン末の総括、至近の回顧、について補足を加えておきたい。

1) 予測……初期の新聞報道には、“～の噂”“近いうちに～とのこと”というたぐいの見込み記事が多い。一方で記事の取消や訂正の夥しいことと考え合わせると、この時代のジャーナリズムの有り様の一端がうかがえる。流行ではないが、軍人、官僚の制服の改正といったことでさえ、役所内の動きの察知、部内の噂の報道からはじまることが少なくなかった。しかし年表項目としては当然、施行の時点によって提示する。1870、1880年代には特殊な事情として、高官の夫人・令嬢の礼装が公的規制の対象となっていた。この場合は新しいプロトコールに則る衣裳が、晴れ

の行事の数ヶ月前には大量に京都に注文され、流行の前駆現象をなすようなこともあったらしい。  
[時事新報 1884/10/28 (2) ; 11/24 (2)]

なお、官服の制定・変更など、1880年以後<sup>6)</sup>であれば官報に掲載されるような公的内容は、原則として施行年次によってA欄〈事件〉のところで提示し、出典は省略する。

3) 市場・店頭(店頭観察を含む)情報……ジャーナリズムが小売店舗から得る情報のうち、売ろうとする商品を売れる商品として紹介されるのは当然ありうることである。女学生、インテリの若い女性を対象とした『貴女之友』のようなタイプの雑誌に“売れ口宜しきは—”などという紹介があったとしても、それだけで信用はしにくい。[『貴女之友』No.60, 1889/7月, p.27-29] また厳密にいうと、売れた商品がそのまま流行商品とも言えないのである。三井呉服店の大番頭高橋は、呉服屋は売れた品はわかるが、なにが流行しているか、つまり御婦人方の嗜好に本当に合致して愛用されているものが何かは呉服屋にはわからない、なぜならいまの日本には、それを確かめる場所がないからだと言っている<sup>7)</sup>。これと似た事例として、1910年代から1920年代にかけて日本では、主に嫁入り道具のひとつとしてソーイング・マシンがよく売れた。しかしその多くが利用されなかったといわれている。[読売 1922/4/20 (4)] 1964年、アメリカではトップレスの水着が人気をあっつめて10,000着以上を売った。しかし実際に海岸でそれを着た女性を見たひとはいなかったというエピソードも、われわれの記憶のうちにある。

5) シーズン末の総括、至近の回顧……年末やシーズン末の回顧であるが、3, 4年以内の近い過去の回顧であれば、C欄の回顧ではなくここに入れるべきものもあろう。3, 4年程度であれば時間的な錯誤は少ないと考える。また総括の記事での注意は、記述者の個人的好悪にもとづいた、総括的コメントである。記述者がある流行スタイルに批判的な嫌うような場合、この流行は終わった、このスタイルはもう古い—というコメントがしばしばみられる。しかし年月を隔ててみると、実際はまだその流行のはじまりの時期だったということがわかる例がある。1880-90年代の束髪、1920年代の断髪に、その顕著な例が見られる。

## 2. 5 データ採録についての採録者の判断、評価に関わる問題

資料から、年表として適当な、あるいは必要と思われるデータを、一定の基準にもとづいてぬきだすのが年表編纂者の仕事であって、複数のデータを集約したり、データの内容に関連するコメントを差し挟んだりすることは、ほんらい編者の仕事の範囲ではない。ただし時として、選択以前の大量の資料に直接あたっている編者だけが察知できる類の情報が存在する。その主題、領域にとっては重要とおもわれる情報でありながら、単一の記事そのものには直接現れないような性質のものである。こうした情報を年表にどのように反映することが可能であるか、あるいは許されるかの問題を記事出現の態様を例にとって考えてみたい。

とくに逐次刊行物について、時代を追って目を通して行くと、ある主題がはじめて紙・誌面に現れるのに出会うことがある。これが初出である。初出には、その1紙についての場合と、すべての記録を通じての場合との2種類がある。「明治事物起源」(石井研堂 橋南堂、1907)に代表されるものの始まりの考証は、当然ながら第2の立場で、あらゆる資料を渉猟することになる。

それとくらべると、新聞記事としての初出であるとか、東京日日新聞1紙における初出とかはインパクトに欠け、あまり意味がないようにも思える。しかし東京日日とか読売のような大きな読者をもっている新聞に採り上げられた、いやむしろ採り上げられなかったという事実は、無意味ではないと考えるべきだろう。私の言う〈風俗的標準〉という観点からすれば、ものの起源からは常にある程度の時間的距離を置いている、一般的普及の方をこそ重く見る必要があるといえる。

たとえば「明治事物起源」にも、わが国へのパーマネントウェーブの導入の時期についての項目がある。しかし具体的な身装の態様を示すという立場からすれば、横浜港へ輸入するはずだったアメリカ製のパーマネントウェーブ・マシンが、震災のために神戸港に回漕されて、それで神戸がわが国でのパーマネント第一号機をもつことになったというようなエピソードは、話のタネ以上の意味をもちえない。

したがって本年表においては、風俗としての標準化の状況、流行としての拡大の態様を反映するものとして、大新聞における初出記事を採録するようにつとめる。

つぎに頻出とは、同じの、あるいは同類の記事がくりかえし現れることである。初出の場合は記事の見落としという編者のミスが避けられないのに対して、頻出の方は比較的 safely に採録することができる。もっとも頻度というものは、複雑な要件から成り立っている相対的な現象で、頻繁であるかどうかの判定はむずかしいという面も持つが。

1890年代後半、どんな新聞にも、男女の外套、コート類の広告が増加する。外套類の宣伝は当然秋から冬にかけて掲載されるが、たとえば大阪朝日新聞の場合、1891年の10、11、12月の紙面では1件であるのに対して、1894年には45件となっている。

要件はいろいろあるにしても、頁数が変わらず広告の全体量もほぼ同様であるから、男女の外套類が1890年代半ばの京阪での人気商品であったことは、間違いないはずである。

終出ということばは耳慣れないが、ある主題について、その記事が最後のものであるような場合である。ある期間においての最後、という場合も含められてよい。風俗現象では、はじまり同様にその終焉の時期も大事であるが、いつ頃見られなくなったかについてはジャーナリズムの関心は乏しい。ある主題についての最後に近い頃の記述は、その主題自体が見出しになるのではなく、べつの記事の中に、記者自身がたいして意識もせず書いていることが多い。

われわれが風俗的標準を考える場合、ある時代の生活環境は、その前の時代から引き継がれたモノやコトガラによって成り立っている場合が少なくない。1880、1890年代の東京は、煉瓦造りの銀座の街並みや、鉄道馬車でばかり語られる傾向がありはしないだろうか。その時代の都心には黒ずんだ土蔵づくりの商家が、低い軒先にのれんを垂らして並んでいた。表通りでも道路の舗装はほとんどされていなかったから、時期によってひどいぬかるみと、また土埃に悩まされた。すこし横丁へ入れば、昔ながらの総雪隠のある長屋が多かった。湯屋の二階も絵双紙屋もあった。江戸時代はまだ生きていたのである。

この時代の新聞連載現代小説の挿絵を見ると、上流下流を問わず、既婚女性はまだ例外なく眉を落としている。中流以上の家では日常の曳き裾がふつうだった。お齒黒の鉄漿の宣伝が新聞に

載ることもあった<sup>8)</sup>。

ジャーナリズムの関心からは忘れられた後も生き続けるのが風俗である。ここで終出に注目したいのは、せめてその主題が、いつごろまではたしかに存在していたという確証のひとつとしてである。

### 3. 年表の具体的な画面構成－1894（明治27年）を例として

検討課題2) について、明治27（1894）年を例として、A欄（事件）とB欄（現況）のコンピュータ上での画面構成を本文末に提示する（表1）。

### 4. C欄〈回顧〉の構想

検討課題3) は、C欄〈回顧〉であつかう不確定年代のデータに関してである。C欄は、論文1では、紙数の関係で詳細を語るができなかった部分である。

#### 4. 1. C欄〈回顧〉の内容

この欄は、語られる時代から5年以上のあいだを置いて回顧された情報である。その内容のほとんどは、同時代情報であればB欄〈現況〉に記述されるものである。

C欄の項目としてとりあげた回顧情報の多くは、その主題に関する有用な内容と、年代についての言及を持ちながら、しかしその年代に疑いがあったり、特定の1年に確定できない情報である。なお概略については、論文1を参照してほしい。

C欄を別置する主旨は、年表の暦年枠に正確に嵌め込むことのできない情報（以下 不確定年代情報）を、情報記述者の記述にできるだけ添うかたちで、利用者に提供することである。場合によっては矛盾するデータも出てくるが、それはそれでそのまま提供するという形をとる。

不確定年代を、検索面から、一定の規則を設けて特定の数値に変換することがコンピュータ・システム上で可能かどうか考えたが、結局のところ歴史的情報に関しては、その情報量が巨大でないかぎり、強いて数値化しない方が適正であるとの考えに現在はたどりついている。不確定年代を一定の規則によって機械的に数値化することは、‘不確定’を、‘間違い’に変換することになりかねない、というのが私のいまの考えである。

本年表での不確定年代情報提供の方法は、「古事類苑」（神宮司庁編 古事類苑刊行会、1931-1936）のそれに近いといえるだろう。

#### 4. 2. C欄〈回顧〉の基本的構成

1) 主題分けをおこない、65の主題、すなわち項目をもつ。その項目は次の通りである。

なお、65主題の設定については、①すでに公開している〈服装・身装文化データベース〉<sup>9)</sup> から、同時代文献、および現在の研究成果を対象としたシソーラスにあたる身装概念コードの索引頻度、②1910～1920年代の新聞流行記事中的の見出しと小見出しに出てくる語彙、を参考とし<sup>10)</sup>、さらに、実際に出現した回顧に関するデータ約12,000件から、ごくわずかな頻度を示す主題を

除外した(表2)。

(表2)注)頭のコードは概念を表すコードである。コード順にリストアップしている。

2)その主題のなかでの事柄の記述の順序はおおまかであり、厳密な年代の前後関係は設定され

AP014 流行論	EP3 衣服の手入れ・整理、洗濯	AV003 和装下着、小物類(男女)
CP421.1 洋装化、西欧観	EP332 リフォーム、更生服	AV01 和装短着(男女)
CP421.2 モダンガール、モダンボーイ	EP335 古着、古着屋、貸衣装、質屋	AV02 男性の和装全般
CP426 改良服、衣服改良	FP0 小売、呉服屋、百貨店	AV021.1 男性和装コート、外套一般
CP43 地域差、地方の民俗	AQ0 素材、染・織、刺繍等加工	EV2 和服の構造、綿入れ・あげなど
DP05 流行(予測・現況・総括)	EQ15 ニット、メリヤス、レース等	AW1 宝飾品全般、装飾品類
DP108 美人観	FR000 男女服仕立業(和洋)	AW22 頸・肩覆い、ショール、マフラなど
DP111 標準化、標準服、国民服	AT0 子供服	AW3 かぶりもの、帽子、頭巾
DP16 生活理念、社会規範	AU00 アンダウェア	AW4 もちもの
DP202 体型、体格	AU02 洋装、洋服の服種	AW5 履きもの、靴、足袋、着脱
DP203 姿勢、動作	AU110 職業による身装一般	DX000 頭髪、髪型、毛髪一般
DP22 生活環境、衛生・健康観	AU110.1 職業婦人	DX000.0 断髪、散切り
DP225 入浴、身体の清潔・洗浄	AU116 芸者	DX000.5 日本髪
DP23 身体の露出、薄物、裸体	AU117 娼婦、花魁	DX000.6 束髪
DP26 性習慣、性差、異性装	AU123 学生	DX000.7 洋髪
DP30 着こなし、着方、曳き裾	AU123.1 女学生	DX000.9 パーマネント・ウェーブ
DP35 生活水準、諸物価	AU2 TPOによる身装一般	DX040 化粧、香水、美顔術、刺青、美容整形
DP364 身分観念、階級	AU203 ファーマルウェア、礼装	X000 理容・美容業、髪結い
DP4 プレゼンテーション関連	AU215 婚礼	K006 銀座、丸ビル
EP01 品質、品質管理	AV00 女性の和装全般	K09 街路、路面交通、街の賑わい
EP028 手芸、編み物、ホームソウイング	AV001.1 女性和装コート、外被類	H000 照明
EP2 裁縫、衣服製作の技術	AV002 帯、その付属品(男女)	

ないために、当然暦年枠はない。

3)「古事類苑」の前説にあたるものとして〈内容と名称〉を設け、ここでは、信頼できる、あるいはとくに参考とすべき見解を含む、主として事典類を引用する。〈補足〉は文字どおり、編者の補足意見である。

なお、本来の年表においては、〈回顧事例〉に対して編者が発言することはありえないが、本年表では、年表の目的、構成、性格を示すために、一部の情報には注釈のかたちで参考意見を加えている。

以下、65の主題のうちの一つである「束髪」を例として、その一部をC欄に示す。なお、コンピュータ上では、この65項目について、別ウインドウを開くシステムを組む予定である。

#### 4. 3 C欄〈回顧〉の抄出—「束髪」項を例として

束髪 [身装概念コード DX000.6]

〈内容と名称〉

・①髪を束ねて結うこと。また、頭上でたばねた髪の大総称で、男女ともに称した。

②明治十八年(1885)以降、女性の間に流行した水油を使った髪のかき方。上げ巻・下げ巻・英吉利巻・

マーガレット、また庇髪・耳隠し・二百三高地・七三・オールバック・S巻など、その時の流行によっていろいろな名がつけられた。

[小学館「日本語大辞典」2000]

・①一般ニ頭上デ束ネタ髪ノ総称。男女共ニイウ。男モ月代ヲ剃ッタノハ近世ノコトデ、ソレマデハ種々ノ束髪ガ行ワレタ。

②洋風ニ倣ッタ結髪ノ総称。起源ハ明治18年(1885)頃。最初ハ前髪ヲ引ツメ、毛ヲ三ツ組ミニ編ンデ頭上ニ丸ク巻キ、ピンデ留メ、絹糸ニ珊瑚等ヲツケタ網ヲ被セタ。明治35年(1902)頃、下田歌子、川上貞奴等ニヨッテ前髪ヲ大キク取ル風ガ流行シ、次イデ日露戦争(1904-1905)頃ニハ前髪ヲ前ニ突出シタ廂髪トナッタ。二百三高地・花月巻・エス巻等ハ当時ノ髪ノ形デ、別ニ夜会巻・マーガレット等モ流行、廂髪ハ後年周囲ニモ梳毛ヲ入レテ形ヲ整エルヨウニナリ次第ニ日本髪ノ感ニ近ヅキ、久シイ流行ヲ続ケタ。大正(1912-)ノ初期、前髪ヲ二ツニ分ケタ女優鬢ガ起コリ、震災(1923)直前カラ七三・耳隠シ・鬢ナシ・片耳隠シ等ガ流行スルト共ニ、鋺デ髪ヲ縮ラス風ヲ生ジ、漸次結髪ノ形ガ小サクナリ、束髪ハ全ク在来ノ形カラ一変シ、名モ洋髪ト呼バレルニ至ッタ。束髪ハ今僅カニ残ル廂髪系統ノ周囲ノ大キナ旧式ナ髪アルプス・鬢無ナドヲ意味スルニ過ギナイ。(芝山みよか)

[富山房「国民百科大辞典」1935]

〈補 足〉

・束髪は、当初は外来の髪形という意識がなかったため、洋髪(西洋髪)とよぶひとつもあった。たとえば藤沢衛彦は、著書『明治風俗史』(春陽堂、1929)のなかで、洋風束髪、または単に洋髪と呼んでいる。(p.373)

・末期の草双紙や初期新聞小説のなかで、束ね髪といわれているものは、洗い髪をぞんざいに巻きあげて横櫛や簪で留めておくような、仮の、あるいは手軽なつくね方をさす。初期の束髪指導書、たとえば、渡辺鼎著『束髪案内』(女学雑誌社、1887)では、この種の和髪も、束髪に含めている。

・束髪は先の芝山の解説の通り、スタイルとしては一定したものではなく、人気のスタイルにも変遷があった。その全体の特色は、髪を上げて結ぶという点で日本髪の特徴を受け継ぎ、ただし前髪、鬢、タボ、鬢を分けないという点で日本髪と区別される。

油を用いるか、その油がどんな種類か、膨らみをつけるか、そのためになにを使うか、アイロンを使うか—といったことは、長い期間には大きな変化があって、いちがいにはいえない。1930年代以後は芝山の指摘するように、かつての庇髪のなごりの、鍋蓋のような、アンコで膨らませたスタイルで、主に中年以上の女性の髪型になった。第二次大戦以後には結うひとつも稀になったが、1970年代以後でも、老婦人のなかには見かけられた。[以上、主として『美容画報』;『すがた』;『新美容』;『現代理容大鑑』すがた社1940、および聴き取り資料にもとづく]

・1920年代以後になると、束髪をハイカラとよぶようになった。さいしょハイカラというのは束髪の一つであったが、やがて混同され、同一化したらしい。文献の上では、1910年代末に、そのことを指摘する例はじまり、『婦人画報』1918/9月、p.31;鹿児島新聞1919/1/24(8)]1920年代半ばにはこの言い方がほぼ定着して、第二次大戦後まで続いている。

〈回顧事例〉

・トシヤレ節の流行は明治三四年（1870, 1871）まで続いて、その間斯くの如くにもうたわれた。‘姉さん姉さんお前の頭にぐるぐる巻いたはなんじゃいな トコトシヤレトシヤレナ これは流行の束髪、いぎりす結びを知らないかトコトシヤレトシヤレナ’ と、モガの先祖をうたっている。[添田亜蟬坊・添田知道「流行歌明治大正史」p.10, 春秋社 1933]

注釈) 西洋風の束髪が存在したというデータのなかでは、飛び抜けて古いものである。ただしこの替え歌が明治3, 4年のものだった、という根拠は、添田父子が存命していない今では謎である。

・渡辺の束髪会—明治十五六年（1882, 1883）の頃 [鹿又松内「束髪」p.7, 『貴女之友』N0.37, 1888/12/30, pp.7-10]

・束髪の変遷を見ると明治十七年（1884）頃に頭の真ん中に牛の糞といわれたようにグルグルと髷を作って糸のネットをかけたのが元祖で、[三須 裕「束髪の変遷」日日 1927/3/17 (5)]

・明治十七八年（1884, 1885）の頃日本婦人の洋装と共に、束髪なるものが上流社会に盛んに行われたものにて、初めは洋装の時にのみこれを結びたりしが、明治二十年（1887）四月島田三郎、渡辺 鼎、浜田 昇、石川映作等の諸氏相謀りて、婦人束髪会なるもの起こりて、[稲葉小千「日本結髪史」（春陽堂 1918）]

・六年前（1892）、西洋より束髪と称する一種の結髪を伝え、流行一時を極め、(中略) 倫敦ならずして護謨の櫛を挿さむ令嬢あり、巴里ならずして薔薇の簪を戴く貴女ありし。それも束の間の流行廃れたり。[服部喜太郎「日用宝鑑 社会有益秘宝」頁附なし 求光閣 1898]

・最初日本で束髪の流行したのは、明治二十二三（1889,1890）年頃、鹿鳴館時代と呼ばれていた時代、当時の知識階級婦人達にみられたものでした。それは前髪の毛をぶすりと切って額に下げ、残りの毛を三つ編みなどにしてくるくと巻き、その上に黒毛の網口珊瑚の小粒玉を飾りにつけたものなどをかぶせたものであったそうです。(中略) 第二期は日清戦争（1895-1896）の前後で、前髪を大きく沢山出したのをハイカラと呼び、髷の形も添え毛などして大きくなり高くなって、二百三高地などという名がつけられていました。[都 1925/5/5 (9) 「婦人髪将来」]

・明治三十年（1897）は束髪衰微の時代で、その当時この髪に結んで居た人は、山の手住居の官吏銀行会社員の夫人令嬢が夜会結びにして居た位で、あまり多く見かけなかった。(中略) 然るに日露戦争（1905-1906）以来流行の束髪は、花月巻きS巻きから一時二百三高地と唄われし今の廂髪に変化し、女学校の教員生徒は素より貴賤の隔てなく結び替えて容易に廃らない状況である。[近藤蕉雨「十年前の髪飾りと今日の髪飾り」p.13, 『時好』1909/5月 pp.12-16]

・明治三十七八年（1905-1906）頃に料理店花月の女将が結んだというので花月巻きというのがあった。これは巴に似た結び方である。（中略）束髪の前髪をとるようになったのは明治三十六（1903）年頃下田式と云って、下田歌子女史によって前髪を高く張り出すことが認められた。それから後三十七（1904）年に川上貞奴が西洋を模倣して前髪と鬢とをつきだして結ったのが初めて、庇髪と名づけて流行した。この庇髪は一名ハイカラとも云われたが、今でもときどき散見することがある。束髪にかもじを入れたのは明治二十年（1887）頃に英国のカウントンという婦人が麻布に住んでいて、髪の毛の少ないのを補うために、かもじ屋に頼んでこしらえたのが初めてだということである。[井上康文「大垂髪から断髪まで」p.271-272, 『女性』（プラトン社）1927/10月、pp.259-273]

・日露戦（1905-1906）後をひとつの境界線として、つい最近まで束髪が大変流行していましたが、（中略）一時束髪が大流行した反動と、髪が悪くなる恐れがある所からか、最近はまだ日本髪が漸く認められて、だんだんと束髪の勢力を奪いつつあるようで御座います。[森ちえ子「移り行く流行の髪形」p.47 『婦女界』1915/8月 pp47, 48]

・束髪というものがわが国に結われましてから、彼是四十年、その間に多少の変遷はありましたものの、（中略）日本髪に恐ろしい変化を与えたというような訳ではなかったのであります。もっとも其のうち割合最近に起こりまして今尚流行しております庇髪の前髪は、在来の日本髪というものに対立して束髪というひとつの結髪振りになっては居りますが、その髪、扱い方、形などから考えて見ると、矢張り在来の日本髪と大して変わったものではありませんが、大正九年（1920）頃から束髪というものが著しく欧風化して、そこに全く新しい束髪というものを日本に起こしたのであります。[三須 裕『お化粧と髪の結び方』p.109, アルス 1925]

・明治末期の婦人達は、下町情調の好きなものは日本髪、知識階級の婦人はハイカラ髪という風に、その数は丁度半々位になって来ました。（中略）するうちに明治四十五年（1912）から大正にかけて、大正巻、改元巻、九重巻と日本式束髪の完成の絶頂ともいべき千篇一律の束髪が矢継ぎ早に生まれてきました。[[明治大正結髪史] (2) p.11, 『美容画報』1926/12月 pp11-13]

・四五年前（1899, 1900）までは束髪にも亦いろいろな種類があったが、今はたいてい一定した。[[流行案内] p.17, 『家庭のしるべ』1904/10月 pp14-21]

(表 1)

1894 (明治 27) 年

A 欄〈事件〉

- ・ 1/ 京都の織物業者川島甚兵衛、ロシア皇太子より〈御用達〉の称号を許され、今後同殿下の徽章を、店舗等に掲示する権利を与えられる。[読売 1/29 (2)]
- ・ 3/ 両陛下の銀婚祝賀の豊明殿の夜会に、天皇が皇后の手を取って出御したのが話題になる。[日日 3/13 (3)]
- ・ 3/ 郵便配達夫(遞送人)に、武器を携帯させるかどうかの論議あり。[日日 3/16 (3)]
- ・ 4/ 11 日、ティファニー社パリ支店長スポールディング、天皇への献納品を携えて来日、日米間の宝飾品取引に関して我が国の業界関係者と懇談する。[日日 4/11 (x)]
- ・ 10/ 福岡県の 72 才の老翁が、出征兵士用にと草鞋を作って献納した。[読売 10/25 (3)]；会計検査官松岡氏の実父 80 才は、みずからは戦場に赴けないからと、防寒草鞋 200 足を作って献納した。[読売 12/25 (3)]
- ・ 12/ 旅順の劇場経営者唐某、日本人向けに上等浴場を開業したところ、毎日非常の繁盛とのこと。[読売 12/21 (3)]
- ・ 12/ 東京湯島の高橋某、堅牢で、氷の上でも滑らない軍用草鞋の特許を申請。[読売 12/21 (3)]
- ・ 12/ 新流行を追う粹人佳客の好伴侶『流行報知』発刊。毎月 3 回、東京牛込の流行報知社より。  
〔刊行物〕流行報知社《流行報知》創刊(12 月、月刊)

B 欄〈現況〉

風俗標準画像

- (A. 景観) (B. 未婚女性) (C. 既婚女性) (D. 男性) (E. 子ども) (F. 美しい人像)
- ・ 1/ 新春の市況一京都の三が日中に、“礼者は洋装減じて和服が多くなりたるは何処もおなじきにや”。[日日 1/5 (3)]
  - ・ 1/ ‘陸軍各隊下士以下の元日の服装を見るに、一外観上齊一を欠くの恨みありて頗る醜し元来服装規則にはそれぞれ規定ありて決して斯くの如き区々の服装を為すを許さず一。’ [日日 1/5 (3)]
  - \* 2/ 大阪婦人の流行衣類。[都 2/9 ; 10 (5)]
  - ・ 3/ 一時は蝙蝠傘に押されていた和日傘が、とくに地方では復活している。蝙蝠は破れると繕うのがむずかしい、というのが理由。[都 3/16 (2)]
  - ・ 3/ 流行の根掛 身狂言に因んで、福助好み ‘おみわ掛け’、栄三郎好み ‘妹背掛け’、団十郎好み ‘清正の烏帽子に牡丹’、左団次好み ‘衣装葛籠に牡丹’ を売り出したところ、なかなかの人気と。[日日 3/29 (4)]  
[都 3/29 (3)]
  - \* 5/ 白茶と薄鼠の流行 [都 5/11 (2)]
  - \* 5/ 流行の夏衣 [都 5/18 (2)]
  - \* 5/ 団扇の景況 [都 5/22 (1)]

- \*5/ 京都呉服の新傾向。[日日 5/26 (10)]
- \*6/ 夏向婦人の髪飾り [都 6/3 (2)]
- 7/ 陸軍省、マニラ麻製の軍用草鞋の工夫を重ねる。[日日 7/15 (3)]
- 8/ 奥様令嬢がしていた上巻をだれもがするようになったので、奥様令嬢女学生は、諸輪、片輪など手の込んだ結び方をするようになった。その経過について。[←森←東京経済雑誌 8/4]
- 8/ 大阪南地五花街が南京虫で悩まされる。難波新地のある置屋の絨毯から湧いたとの噂。[大朝 8/12 (4)]
- 8/ 近頃、雪駄が流行っている。横浜の貿易商人が外国商館に出入りするときに、そのまま床に上がれて都合がよいことからはじまった、とされる。[←森←東京経済雑誌 8/25]
- 9/ 軍需のため、毛布、毛織物の価格暴騰。[日日 9/14 (8)]
- \*10/ 日清戦争従軍新聞社特派員の旅装。[日日 10/13 (10)]
- 11/ 呉服商、古着商、質商いずれも例年より二三割方の不景気。[都 11/2 (2)]
- 12/ “年齢二十四五の女あり、頭には子供用の陸軍士官用の帽を戴き身には当時流行の戦争更紗の筒袖を着して靴を穿きおもちゃのサーベルをさげー” [都 12/9 (3)]
- \*12/ 流行の下駄類 [日日 12/23 (7)]
- 12/ 今年景気のよいもの一靴、鞆、洋服。洋服は一昨年来転業した者も、追々復業している。[都 12/21 (1)]
- \*12/ 大阪府下の、古着古物商、理髪業・女髪結の景気 [大毎 12/28, 29 (6)]
- x/ 大形の丸髷、島田流行。[←鈴木『三代社会風俗年表』]

注) 1) 風俗標準画像は、文字 (A 景観) の上にサムネイルの画像を表示する。それぞれの画像をクリックすると拡大可能。より多くの画像を見たい場合は、身装画像データベースにリンクすることができる。

2) 文字データの頭に\*のあるものは、たとえば出典をクリックすると原テキストを参照できる。

3) C欄(回顧) についての内容は4章で言及した通り。コンピュータの画面上ではB欄の下にC欄を設け、先に示した65主題を表示。各主題をクリックすることにより、その内容を参照することができる。

#### 註)

1) 『大阪樟蔭女子大学(学芸学部)論集』41号 2004年3月 pp.161～174

2) 『女性』(プラトン社)1924/4月の「大新聞の婦人欄と家庭欄」(p.394-403)という各界の女性へのアンケートに対する回答のなかで、奥むめお、神近市子らが小売相場記事に対する不信を表明している。この回答は奥むめお。

3) 高橋晴子「近代日本の雑誌ジャーナリズムにおける身装関連記事」『ファッション・ドキュメンテーション』No.5, 1995年12月, p.56-59

4) 美しい人像の概念については下記論文の議論に委ねる。

高橋晴子「身装画像にみる近代日本の文化変容—データベース化のための基礎研究」(大阪大学大学院文

学研究科博士論文 第 17464 号, 2003, p.195-270

- 5) 前出。高橋 4), p.15-33
- 6) 官報刊行以前の公的情報は、町村での掲示と、新聞が取材して報道するという方法をとっていたが、1880 年からは、行政司法が一定の新聞を選んで公示することになった。
- 7) 高橋義雄 都新聞 1898/5/27 (1 面)  
高橋義雄「日本の服装と流行」『唾玉集』春陽堂, 1906, p.187
- 8) 東京朝日新聞 1891/11/28 (6 面)
- 9) MCD (民博コスチュームデータベース) プロジェクト作成。http://www.minpaku.ac.jp より公開。
- 10) 前出。高橋 4), p.123-130